

遠い視線を持った身近な実践

上うえ廣ひろ榮えい治じ

いよいよ一年後に、創立六十周年を控えた「もの前」の年です。六十年に及ぶ来し方を思い、新たな出発を考えるせいでしょうか、最近、私はおりに触れて「遠い視線と身近な実践」の大切さを思います。

私たちの視線は、つねに遠大な未来に向けられていなければなりません。しかし日々の言動は、あくまで身近で現実的に地に足を着けたものでなければなりません。自分に確実にできることの実践でなければなりません。これまでもそうであつたし、これからもそうでなければなりません。私は、そう痛感するのです。

ではなぜ、私たちは「遠い視線」を持たなければならないのでしょうか。例えば昨年暮れに、名門商社の驚くような不祥事が報道されました。

事の発端は、東京都の主導で神奈川県、埼玉、千葉の三県が同調して、一昨年からディーゼル車の排ガス規制が始まったことでした。排気ガスの粒子状の物質がガンや花粉症などの健康障害を引き起こすことを重くみて、公害性の低い車への転換や排ガス浄化装置（DPF）の装着を義務付けたのです。

DPFが装着されていない旧来型のディーゼル車は首都圏への乗り入れを禁じられ、もし違反すれば五十万円以下の罰金という厳しいものでした。それから一年以上がたって、東京の大気は明らかに澄んできました。

た。大阪など他の大都会に行くと、如実にその臭いの違いがわかります。去年は、花粉症が軽かった、あるいは出なかったという人も少なくありませんでした。

不況下で新たな設備投資を迫られた業者たちも、この規制の目指すところを理解して、よく改善に努めました。誰もが、こうした規制の先にある「より善い未来」を歓迎したのです。

ところが、ある大手商社が都や国の補助金を受けて開発した排ガス規制装置のデータが、ごまかされたことが発覚したのです。浄化能力が基準の七割しかないのに、データを偽造して行政から「指定」を受けていたのです。そのため、装置を装着した車両の三分の一のおよそ二万台がこの偽装置を購入し、その売上高は二百億円以上に達したといえます。

人々を騙して偽装置を売りまくった名門商社の人たちは、いったいどこに視線を向けていたのでしょうか。すぐ目の前の利益、ただそれだけです。わずか一年後に悪事が露顕することすら予測できなかったのでしょうか。儲け口があると思つたとたんに、未来を考える能力を凍りつかせてしまったのでしょうか。

目先のビジネスチャンスをものにしたい。しかし開発した装置のできは悪い。そこで、データをごまかして装置を売った。その間一貫して、地元の人々の健康も、未来の首都圏のあるべき姿も、まったく意識しなかったのでしょうか。彼らの視線は卑近な目先の利益にしか向けられていなかったのです。

卑近な視線しか持たないのは、果たして一部の企業だけなのでしょうか。否、私たちとて、それは無縁なことではありません。この商社ほど確信的ではないにしても、人は多かれ少なかれ、「目先の利」にとらわれるものです。

例えば、ある人がたまたま朝早く目覚めたとします。そのまま起きてしまふべきか、もう少し寝たほうがいいのか。近視眼的に見れば、もう一度眠れるのなら楽には違いありません。しかし「遠い視線」を以って

すれば、これを機会に早起きの習慣を身につけようと思うかもしれません。

どちらがよいかは、朝起きを実践している皆さんには自明のことですから申し上げないとしても、このように、いま為そうとしていたことが、「善い」ことであるかどうかという判断を迫られることが、個人だけでなく国家レベルや地球レベルでも無数にあるのです。

国家的、地球的なレベルの例を一つだけ挙げておきましょう。カスピ海の東にアラル海という湖があります。皆さんが使っている地図帳が古いものなら、ずいぶん大きな湖だとわかるはずですが、面積が約七万平方キロで琵琶湖の百倍もある世界第四位の湖でした。

ところが最新の地図で見ると、かつての四分の一。しかも、湖は完全な死の海と化し、周辺一帯も塩害や砂嵐で荒れ果て、砂漠化が進んでいます。原因は大規模な農場開発でした。この大きな湖を支えていた水流から大々的に水を引けば、半乾燥地帯に豊かな大農場が出現するはずでした。

今でこそ「無謀な灌漑農業」といわれていますが、当時は「計画経済のソ連ならではの壮大な自然改造計画」だと称賛されていたのです。「遠い視線」に欠ける計画だとは、誰も気付かなかったのです。

アラル海に流れ込んでいた河から用水を引きはじめると、たちまち湖に変化が生じました。流入量と蒸発量が保っていた微妙なバランスが崩れて、湖岸線が後退し始めたのです。

湖が後退すると、いっそう河水が湖に届かなくなり、湖の後退はさらに加速しました。湖の水量が急減すると塩分濃度が上がり、生物が死に絶えました。干上がった湖底は砂漠になり、気温が上昇して砂嵐が吹き募ります。現在でも、湖岸は後退し続けているのです。

当初は地元住民の誰もが「目先の利」とらわれて、大歓迎だったに違いありません。人間はほとんどの場合、とりあえず近視眼的な「利」とらわれて、「遠い視線」を失ってしまうものなのです。

ところで、「遠い視線と身近な実践」のうちの、「身近な実践」の例も一つだけ挙げておきましょう。日々の実践に励まれている皆さんなら、昨年、大リーグの年間最多安打記録を八十四年ぶりに塗り替えたイチローのコメントを思い出すだけで十分でしょう。目標の達成を可能にしたものは、「小さなことの積み重ねだけだ」という、あの述懐です。

経営学の清水龍登しみずりゅうとうさんは、長年の日本企業の研究から、優れた経営者とは「世の中の大きな流れの方向を大きく、幅広くとらえ、同時に足元のことを細かく深くとらえ、それをつねに結びつけて考えている人間だ」〔社長のための経営学〕千倉書房〕という結論に達しました。経営者も「遠い視線と身近な実践」が大切だといふのです。

しかし、ここで語られている「遠い視線」とは、実践倫理のそれからすれば、はるかに近視眼的であるといわざるを得ません。彼らの「将来の展望」とは、五年十年という短さの、しかも経済の動向だけのものです。これまで世界中の企業が「世の中の大きな流れの方向を大きく、幅広くとらえ」た結果、大規模開発を構想し、無数の環境破壊を行なってきたのです。彼らの視線は開発や発展という時代の先端にまでは届いても、その先の「大自然の摂理」をとらえ、「我も人ももの仕合わせ」までを見据えることはできなかったのです。そして、その近視眼的な判断によって、多くの「不善」をなしてしまつたのです。

かつてに比べれば、行政や企業の視線も、ずいぶん遠くまで届くようになりました。だから、首都圏のデューゼル規制も行なわれたのです。しかし、それを受けた商社の不正は、まだまだ無数の近視眼的な迷走があり、そうした「目先の利」による決断は遠からず破綻するということを教えてくれます。

「遠い視線」を堅持しつつ、日々の「身近な実践」を積み重ねつづけることの大切さ。創立六十周年を一年後に控えて、わが会の使命はますます重要になってきています。